

# アサリ移殖技術研究

(予算区分 県単独 研究期間 平成18～20年度)

担当：浜名湖分場

## 【研究の背景とねらい】

浜名湖のアサリ漁業者は、湖内で大量に発生した稚貝を他の漁場へ移殖していますが、移殖先で稚貝が死亡するなど十分な効果が得られていません。そこで、浜名湖内の稚貝の発生状況、移殖後の稚貝の成長や歩留りなどを調査し、効率的なアサリ移殖技術を開発しました。

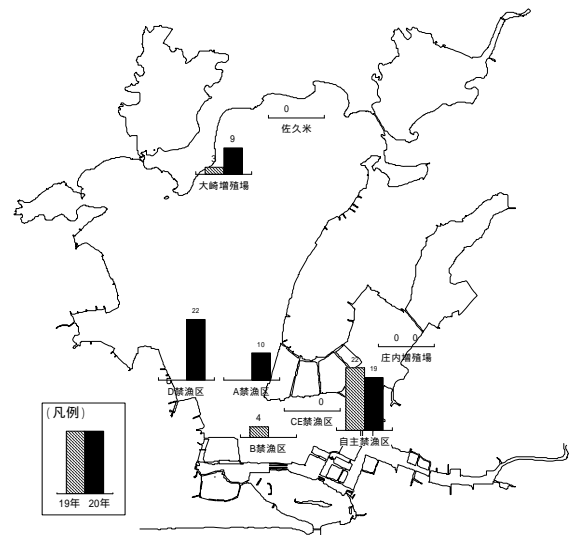


## 【研究成果】

- ・アサリ稚貝の出現状況：殻長1mm以上のアサリ稚貝は主に秋～冬に出現し、特に19年秋は湖中央部～奥浜名湖一帯において1～3万個/m<sup>2</sup>の高密度で出現しました。これらの生残は良好でしたが、夏以降の成長が著しく停滞したため、間引きが必要と考えられました。
- ・移殖適地：殻長約20mmのアサリ稚貝を平成19年5月に5地点、平成20年5月に6地点へ移殖し、歩留りやその低下原因、成長を地点間で比較しました。

歩留りは地点間で大きく異なりました(図1)。奥浜名湖では19年秋に出現したヘテロカプサ赤潮で壊滅的な被害を受けました。庄内増殖場では初夏～秋にノコギリガザミの食害が大きく、アオサの腐敗による環境悪化にも影響を受けました。CE禁漁区ではアオサの腐敗とツメタガイの食害が影響を及ぼしました。一方、自主禁漁区とD禁漁区では歩留りが良く、6ヵ月後の歩留りは19～22%でした。

成長は、庄内増殖場で良好でしたが、その他の地点間でほとんど差がなく、移殖4ヵ月後には漁獲可能な殻長28mmに達しました。庄内増殖場の歩留りは極めて悪く、成長差は移殖適地の選定には重要ではなく、歩留りが良い自主禁漁区とD禁漁区が適地と考えられました。



移殖6ヵ月後の歩留り

- ・移殖適季：移殖適地の検討と同様の方法で、平成20年5月(殻長22mm)と同年10月(殻長17mm)にアサリ稚貝を4地点に移殖したところ、いずれの地点とも5月に放流した稚貝の歩留りが良く、移殖適季は春であると考えられました。
- ・放流方法：春に採取した稚貝を船上で2時間放置したところ、活力の指標である貝肉中のグリコーゲン含量が3割減少したことから、稚貝採取から放流までの一連の作業を2時間以内に実施することが望ましいと考えられました。また、密度を変えた移殖試験の結果、移殖放流先の密度が1,000個/m<sup>2</sup>以下となるように放流すべきと考えられました。

## 【研究成果の普及方法】

- ・採貝漁業者の役員会合等において成果を報告しました。
- ・広報誌「はまな」等で成果を伝達しました。
- ・結果の一部は論文として発表しました。

(作成 平成21年3月)